

## 【神様が私たちに下さった一番最高の祝福】

今日の聖書本文:アモス書8章11-14節・今週の暗唱聖句:ヨハネの福音書15章7節

説教:鄭南哲牧師



愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！一週間もみんなお元気でしたか。今インフルエンザが流行っている時期で、また林羊那ちゃんもかかって来れませんでした。みなさんもぜひお大事にして下さい。羊那姉妹の上に、そして、体の癒しが必要な方々の上にも今日も主が癒しの御手を差し伸べ、お手を素早く回復されるように切に祈ります。アーメン！

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！

今年入ってから神様の御言葉に対する我々の姿勢と反応が今年の勝負の鍵となることを強調され、聞いています。

みなさん！2013年クリスチャンプレイズチャーチの目標覚えていますか。

“共に御言葉に深く根ざして行く教会”です。まだ遅くありません。まだ大丈夫です。まだ一月です。改めて決心し、実行し始めた時が一番早い時ですから。今年も常に共に御言葉から離れないように、主の御言葉で信仰の基礎を点検し、しっかり建てて行けるように今日も共に主の御言葉で自分の信仰の基礎に立ち返る時間となりますように切にお祈り申し上げます。

70年時代にベトナム戦争があった時、60万人に上るアメリカ軍がベトナム前線に派兵(はへい)されました。戦闘(せんとう)の結果、捕虜(ほりよ)になる者たちもいました。ハノイのある捕虜収容所(しゅうようしょ)では、食糧の不足のため、6ヶ月の間、ほとんど食事が出なかったそうです。その結果、収容所内ではどんなことが起こったと思いますか。

ねずみや猫、蛇など手当たり次第に何でも捕らえて食べたそうです。しかも生で食べたという話を聞いたことがあります。

‘どうしてあそこまで振る舞いをするのだろうかと自分ならいくらお腹がすいても決してそうしないのに’と、今の時代、食べるのに困ってない我々にとっては信じられかも知れません。

しかし、人は極度の飢えになると、手当たり次第に何でも食べるようになるのです。選(え)り好みする余裕がもはやないのです。愛するみなさん！そのように霊的にも飢えると、同じになります。

人は霊的に飢えると、手当たり次第に何でも食べようとするのです。今日日本内には大きな岩や太陽、海、木など自然や動物、人によって作られた物や死んだ人の霊など神として拝んでいる姿が普通に見えるでしょう。

そして、今日はいろんな新興宗教がどれほど多くて、にせ教会、にせキリスト教のようなカルトもたくさんあるわけです。

しかし、問題はそんな変なおかしいところなのにもかかわらず、人々がはまって行っていることです。かえって霊的な面においては飢え渴いている人々が急増されて同時に様々な人によって作られた宗教も急増されています。占いをする人一言によって多くの人々が従っています。クリスチャンさえも度を過ぎるほどの疲れ、劣等感、罪の罪責感、信仰の弱さと無機能を訴えながら無気力を訴えているように見えます。

なぜみなさん、このような現象(げんしょう)が起こっていると思いますか。

今日の本文旧約聖書の中アモス書8章11節には、“見よ。その日が来る。神である主の御告げ、その日、私は、この地に飢饉を送る。パンの飢饉ではない。水の乾くでもない。実に、主の言葉を聴くことの飢饉である。”

### <1.神様から与えられる一番の災い。>

愛する信仰の家族のみなさん！神様を信じている人々の特徴はいつも新しいです。神様の御民はどんなに落ち込んでいて、絶望的な状況においても神様の御言葉を聞けばいつでも新しくなれます。御言葉を聞けば、どんな状況においても、新しい力をいただけるということは、信仰を持たない人には決して理解できない御国の秘密です。神様の人々はどんなに苦しい状況においても神様の御言葉を聞けば、信仰と確信が与えられます。そしてそれが実際に信仰のとおり状況が変わることまでみます。そういうわけで、神様の御言葉を‘いのちのことば、力ある御言葉’と言われるのです。死んでいく人に新しい血を流すとふたたび生き返るように、神様の人々にも神様の御言葉を聞かせるとふたたび生き返らされるのです。

今日の本文は農業をしていたイスラエルの民が神の御言葉をないがしろにしたため御言葉の飢饉を迎える話です。イスラエルが神の御言葉をないがしろにした理由は雨を降らせてくれると言われるバアルの神々を信じたからです。農業をする人々に雨が降らないということは死ねと言う言葉と同じです。なのに、神様はときどき、雨を降らせて下さいませんでした。なぜなら、偶像に頼ることがどれほどむなしいことなのか、彼らの高慢を悟らせるためでした。しかし、イスラエルの人々は神様に嫌われて雨を降らせて下さらないのだと勘違いし、バアルという神より神様の力が弱いのではないと疑いました。

アモス書の内容はこれです。神を信じていたイスラエルの民が偶像を拝んでいた姿をごらんになった、神様はいなごの災いと、火の災いのまぼろしを預言者アモスに見せ、裁くと言われますが、預言者アモスはイスラエルの民の信仰の弱さを訴えながら、信仰でさえ捨てないため、もう一度哀れんで下さってこれらの災いから遠ざけてくださるよう祈り、神様はその祈りを聞き入れて下さいます。しかし、それにもかかわらず、神様からゆるされたのにもかかわらず、悔い改めず、つねに罪を犯します。神様はもはやさらなる裁きをされると言われる箇所が今日の本文です。彼らにさらなる災いを送るが、それはパンの飢饉ではなく、水

の渇きでもないことです。それは主の言葉を聞けない飢饉ということですよ。

みなさん、一度考えてみて下さい。はたけの仕事をする人に3年半雨が降らないことと神の言葉を聞けないことの中で一つ選ぶようにするならば、どちらを選びになるのでしょうか。不渡(ふわた)りの危機に置かれている人に会社が不渡りになることと何年間神の御言葉を聞けないことの中で一つ選ぶようにするならばどちらを選ぶのでしょうか。人々は当然、御言葉は聞けなくても雨が降ることを選び、会社が生きられることを選ぶでしょう。しかし、今日アモスは神様の御言葉が奪われることがどれほどイスラエルの民に恐ろしいことなのかを表せてくれています。

## <2. 主の言葉の飢饉がもたらすこと>

神から離れたイスラエルの民に一番恐ろしい一つの災いを宣布しています。11節です。

ここで、“見よ。その日が来る。”という表現は彼らにもはや恐ろしい災いの日がやってくることを暗示しています。その日はどんな日ですか。食べ物がなくて飢えて死ぬ日ではありません。雨が降らなくて渴いて死ぬ日でもありません。おそらくここまで聞いたイスラエルの民はほっとしたかも知れません。彼らには飢饉や飢えが一番の恐れていたことだからです。するとどんな災いですか。これからやってくる災いとは神のことばを聞けないことから来る飢饉であることです。アモス預言者から神様からこのように告げられたとき不思議に思ったかも知れません。“神の言葉を聞けないことがどうして飢饉なのか。神の言葉はいつでも聞けるものではなかったのか。たいした災いではないのではないのか。”と反応したかも知れません。

しかし、神の言葉を聞けなくなることは神様の御民に与えられる一番恐ろしい懲らしめであることを知らなければなりません。生きておられる神様の御言葉を聞けないことは飢えや、渇きで死ぬことよりさらに悲惨な災いです。愛する信仰の家族のみなさん。！ いったいなぜ、御言葉を聞けないことが災いでしょうか。？

イスラエルの民を神の御民とされるために、神様はエジプトの奴隷の生活から彼らを連れ出して、約束の地に入る前に荒野に導きました。我々は大体荒野を見たことがないので、あまり実感がありませんが、彼らが行った荒野は本当に恐ろしいところでした。そういうわけでイスラエルの指導者だったモーセはその荒野を通った後、“あなたがたが見た、あの大きな恐ろしい荒野を(申命記1:19)”という表現をしました。自分たちでは命を支えることすらできないその恐ろしい荒野でイスラエルの民は生き残りました。農業も、商売もしませんでした。ただ、ひたすら神様のおことばとともに生きてだけです。その時、天からはマナがおりてきて、岩からは水が湧き出しました。神様は御民がパンだけで生きるのではなく、神様から出るお言葉によって生きるということをして40年間の荒野で体験させて下さいました(申命記8:2-6)。神様の言葉とともに生きるということはこれ以上世の法則に従って生きないということを意味します。世の法則によると水のない荒野で彼らが全部死ぬことが当然です。しかし、彼らは死にませんでした。神様の御力が彼らとともにしたからです。

ですから、神様の御言葉を聞くということは単なる有益な教えを頂くことではありません。神様の御声が聞こえるということは神様が私とともにおられるという意味であり、私を守り、私を導いて下さるという意味です。反面、神様の御言葉が聞こえないということは神様が私を離れ、わたしを見捨てたという意味になります。みなさんには神様の御言葉が聞こえていますか。すると神様がすべてを守ってくださると信じます。自分の祈りに答えてくださるでしょう。様々な苦しみややまいからみ守り、また癒して下さるでしょう。イエスキリストを信じ、神様の民となった人たちに一番に表される現象は力ある神様の御言葉が聞こえ始めることです。御言葉が彼らの心を動かします。御言葉を聞くとき祈りたくなく気持ちでいっぱいになります。罪から遠ざかりたくなくなります。どんなに難しい状況でも御前に出て自分に下さる御言葉を聴けば解決できそうな信仰が芽生えてきます。するならば、彼らはすでに神様の御力に預けられているのです。

みなさん！ このように考えられるのでしょうか。羊飼いのないまま、羊だけ野原にいと楽でしょう。なんの干渉もなく草を食べたくなる時食べ、遊びたくなる時遊べばどれだけ楽でしょうか。しかし、問題は夜です。夜になると羊が一匹ずつなくなります。狼が捕まって行ってしまふからです。また、お母さんなしに、子供だけ家にいとどれだけ楽でしょうか。ママのうるさい干渉もなく、食べたい放題、遊び放題です。しかし、お母さんの声が聞こうないということは事実、子供たちに一番の不安を抱かせるのではありませんか。たたかれても、うるさく干渉されてもお母さんがいれば一番安全で、幸せです。このようにイスラエルの民に神の御声が聞こえないということは羊の群れが羊飼いなしに自分たちだけいるのと、お母さんのいない子供たちだけいる状況と同じです。しばらくは自由奔放(じゆうほんぼう)で楽です。しかし、その平安と自由は危機が襲うまでで、問題が起こる前までの有効なのです。危機が襲い、問題が発生するとどうしようもできなくなります。どんなに助けを求めても、助ける人もいません。羊飼いがいないからです。親がいないからです。

今日神様の御民に一番恐ろしいことは食べ物がなく、水がなく、家でもないということではありません。もちろんこの世で生きるためにはそれらのことも必要で大切です。しかし、神様の民にそれよりもっと大切で、一番大切なのは神様の御言葉がいつも聞こえるのかです。これこそが神様が彼らとともにおられるという証拠です。

私は神様が私とともにおられるのかをいつもこの聖書、神様の御言葉で確認しています。いつも新しく語ってくださるかぎり、神様は私とともにおられ私の祈りをきいてくださると確信します。するとどんなに大変な苦しみきたとしても心配する必要がありません。

17世紀イギリスのロージャスという牧師先生がいました。教会員たちがあまり御言葉を大切に思わないことに気づいたその先生はある日説教の時間に神様の声をまねしてこのように言いました。

“おまえらがこの聖書を無視するので、わたしが取ってしまおう。”そして、次は教会員の声でこのように切に言いました。“神様、それはけっしていけません。！代わりに私たちの財産を取って下さい。我々の家を焼き尽くして下さい。私の命をとってください。絶対に、絶対に神様の御言葉だけはとらないでください。”と言いました。ところが、先生の説教を聞いていた信徒たちの中では素晴らしい悔い改めが起きました。礼拝が終わったのに、信徒たちが座って祈っているのです。自分たちがどれだけ神様の御前で高慢だったのか泣きながら悔い改める御わざが起こったのです。その中で一人は祈りが終わった後も、家に帰ろうとして馬に乗ったのに、涙が止まらず、結局馬の首をだきしめてしばらく泣き続けました。その人が17世紀イギリスに一番の影響を与える牧師になったリチャードバックスターという方でした。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！

みなさんにもこのような力ある御言葉を体験されますように切にお祈り申し上げます。このような御言葉のリバイバルが起こる教会となりますよう切に求めます。力ある神の御言葉を聞く民はいつも新しくなります。どんなに絶望的な状況におかれても新しい目でその危機を見ることができます。もちろん御言葉を聞いている人でも、苦しみがやってくると嬉しくはありません。しかし、その苦しみからのがれ、逃げようとしません。御言葉を聞いている人でも憤る時がありますが、その憤りはしばらくしたら消えます。そして、神様に喜ばされない心や間違った行動を取る時もありますが、すぐ、神様の御前に出て行って悔い改める勇気を出します。

### <3.我々を生き返らせてくださる御言葉の力>



平安には二つの種類があります。困ったことがなくて平安なのは本当の平安ではありません。一日も耐えることのできないほどの艱難や迫害があるにもかかわらず不思議に守られている平安が神様から与えられる本当の平安です。それは神様がその人の心を守ってくださっている証拠でしょう。運動選手たちは大切な大会の前にとっても緊張します。その緊張から逃れようとして逃げてしまうとすぐは平安でいられるか分かりませんが、それは本当の平安ではないでしょう。神様から与えられる本当の平安は、信仰によってその緊張を耐え、競技を終え、ついに勝利して味わえる平安なのです。

神様の民に一番恐ろしい懲らしめは神様の御言葉が奪われ聞こえなくなることであることを忘れないで下さい。それより恐ろしいことはありません。それは“おまえら、やりたい放題に生きなさい。それで滅んでもかまわない。”言われるのと同じです。アモスはイスラエルの民が海から海へとさまよい歩き、北から東へと御言葉を捜し求めて、歩きめぐっても見いだせないといいました。(12節) 家庭と、国、民族の未来である若者、希望とビジョンを抱くべき若者でさえも衰え果てると言います。(13節)

旧約聖書のイスラエルの初代王だったサウル王は始めは神様と交わり、御霊に満たされ、御言葉に従っていた信仰の人でした。しかし、彼が高慢になり、神様の御言葉を聞かなくなってから、神様は彼から聖霊をとってしまいました。その時、サウル王は王位から降りて神様に悔い改めるべきでした。しかし、彼は最後まで王の座から降りようとしなかったため、彼の心に悪い霊が臨んだと聖書は言いました。(第一サムエル16:23)神様からの御言葉がこれ以上臨まず、預言者からもなかったため、彼は不安と疑いと、乱暴になり、恐れに捕らわれてしまいます。そういうわけでひたすらダビデを殺そうとしませんか。恵みの御言葉、力ある御言葉がなければ、我々もしきりにきつくなり、争いたくなります。結局サウル王は自分が追い出した占い師に自ら行って死んだサムエルの霊でも呼び出さないと求めるまで墮落してしまいます。神様の御言葉から離れること、神様の御言葉が聞こえないことは決して単純な問題ではありません。霊的に神様の御前で自分が一番高慢でなっている状況であることを忘れてはいけません。みなさんには神様の御言葉が聞こえていますか。去った一週間も神様の御言葉が聞こえましたか。？

人々が神様の御言葉をおろそかにするのは、万事が順調にうまく行っていると思っているからです。いまも十分、食べる物食べ、安全に暮らしているのにどうして神様の御言葉を聞かなければならないのですか。苦しみもなく、危機もないのになぜ？御言葉なしでも商売もうまく行っているし、家も、子供たちも問題がないのになぜ？そうですね。このとき、神様の御言葉を聞こうとすることは自ら、うるさい干渉を受けたいと申し出ることのように感じます。意欲的にちゃんと生きているのに、しきりに罪を探し当てると負担になり気が抜けるような感じを受けます。

しかし、一旦危機に会うと状況は違ってきます。人々の慰めはいくら聞いてもあまり意味がありません。ただ、今自分に下さる神様からのお言葉一言が聞きたくありませんか。“あなたは勝てる。生き残れる。わたしがあなたをかならず守ってあげる。かならずあなたとともにいる。”この一言だけならどんな苦しみも耐え忍ぶことができるのではありませんか。

愛するみなさん！クリスチャンにとって御言葉の燭台(しょくたい)が移されることがどれだけ恐ろしいことなのか少し感じ取ったでしょうか。御言葉がない夫婦、御言葉がない家庭、御言葉がない教会、御言葉がない民族には愛もなく、新しさも、回復も、変化の気配もありません。御言葉がなければ、どんなにすてきなお家に住んでもたえず、けんかばかりです。どんなにお金がたくさんあってもお互いを憎みあいます。どんなに美味しい物を食べても夜は安定剤なしには眠れません。なぜでしょうか。自分の心に神様の言葉が聞こえないから人生そのものが空しく思い、生きる目的も分からなくなってしまうからです。



#### <4. 御言葉を聞くことが最高の祝福です。>

世界的なアメリカのバイオリニストジョシュアベル (Joshua Bell) という人がいました。彼は自分の正体を知らさないで、ワシントンDCの地下鉄の駅で演奏をしたのです。専門家たちは、厳重な安全対策をするようにと、実験の主催者側に忠告しました。当然大勢の人が彼の演奏を聴くために押し寄せるだろうと予想(よそう)したからです。ジョシュアベルは数百万ドルもの価値のあるストラディバリウスのバイオリンで、レパートリーの中で最も美しい6曲を演奏し始めました。最高のバイオリニストが世界最高のバイオリンで、美しい音楽を演奏したのです。ところが、だれも立ち止りませんでした。時折(ときおり)、親の服のはしを引っ張って近づいてくる子供たちがいましたが、大人はそれぞれの思いに没頭(ぼつとう)して、足を急がせるだけでした。ただ一人の女性だけがジョシュアベルだと気づいて、立ち止まって演奏を聴きました。演奏後、その女性だけが払った20ドルは、他の人が差し出した金額の合計よりも多いものでした。人々はみな急ぎ足で、ジョシュアベルの前を通り過ぎて行きました。だれもが、それぞれの仕事で忙しかったからです。

イエス様はこう言われました。「この時代は何に例えられたらよいでしょう。市場にすわっている子供たちのようです。彼らは、ほかの子供たちに呼びかけて、こう言うのです。『笛を吹いてやっても、君たちは踊らなかつた。』(マタイ11:16-17)」。主は、今も主の御言葉で私たちに御声で日々声をかけて下さっています。みなさんはまた一週間その主の御声に耳を傾けて、聞いてきましたか。それとも、忙しさを没頭しているいろんな複雑な思いで聴かなかつた一週間でしたか。主は今も私たちにこう仰せられます。「耳のあるものは聞きなさい！」今年も、いやこれからの一生涯の間、この世で、生きるのに神様から与えられた最高の祝福は何であるかを忘れないで行きましょう。それは、神様の御言葉が我々に聞こえることです。

この世で大切なことは自分を見つけることです。しかし、本当の自分を見つけるためには神様の御言葉を聞かなければなりません。御言葉がなければ本当の自分がだれであるかも知らないまま、テレビや映画に出てくる他人の人生を真似しながら生き、死ぬだけです。神様の御言葉は本質を表せて下さいます。自分はだれであって、どこに向かっていくのか、いったいなぜ生きなければならないのか、これからどんな未来が自分にやってくるのか明確に見せてくれます。神様の御言葉が自分を変え、新しくくださいます。ほかは全部失ってもかまいません。しかし、神様の御言葉のみは失ってははいけません。自分のいのち、自分の呼吸が尽きるその瞬間まで神様の御言葉をつかむその人こそがこの世で一番祝福され幸せだったと言えるでしょう。

こんにち、我々の時代も御言葉の飢饉を感じています。もちろん量的に多くの御言葉がありますが、聴衆(ちょうしゅう)の耳を喜ばせる御言葉も多いような気がします。旧約聖書の中サムエル記第一の3章1節を見ると、その時代の暗闇をこう描いています。“少年サムエルはエリの前で主に仕えていた。そのころ、主のことはまれにしかなく、幻も示されなかつた。”主の御言葉も、主からのヴィジョンも見えない時代！聖書のサムエルの預言者が生きていた時代の人たちはどれほど悲惨な状況だったのでしょか。今日はどんな時代のように見えますか。今日も表にはまるでみことばの洪水の時代のように見えます。今私たちが生きているこの時代こそ聖書をいつもやりやすく手に入れるし、ほとんど自分の聖書も持っているからいつでも御言葉を読むことができます。いつでも教会の礼拝や祈り会や聖書学び会に参加すれば御言葉をたやすく聴くことができるし、あるいは簡単にインターネットやいろんな信仰の本を通してよく御言葉を聴けます。頻繁ではないですが、いろんなクリスチャンの集会やセミナーに参加することでたくさんの御言葉を聴いたり、学ぶこともできます。御言葉が洪水のように溢れているように見えますが、意外と多くのクリスチャンたちが霊的な貧困や霊的な欠乏(けつぼう)のため、少なく無力感を訴えているように見えます。

クリスチャンであっても自分にある度を過ぎるほど自分自身に対する罪責感、ストレスやトラウマ、劣等感、中毒、挫折、怒り、自己批判、自己憐憫に捕らえられ、悲観的、敏感的で回りに心から分ち合える人もいないし、人との関わりさえもいやがる、結局人忌避(きひ)、人を警戒したり、すぐ疑うか、自分の空間、自分の世界に捕らわれている霊的な引きこもり、心の病などの問題に無気力的になっています。なぜでしょうか。教会の中でみんな頑張って信仰生活をやっているのに、熱心に奉仕までもやっているのに。それは信仰の基礎、信仰の基本、信仰の土台御言葉にしっかりと根ざしてないからです。

我々は大切な分かれ道に立っています。御言葉の分かれ道です。いま御言葉の明かりが消えていきませんか。世の欲を捨て、もう一度乳飲み子が母に乳を飲ませるようにと泣くように、“ただ神様の御言葉だけは取らないで下さい。神様、私に御言葉をください。ほかは求めません。ただただ、主の御言葉だけを授けて下さい。今日も我々を主の御言葉で新しくし、御言葉に献身し、御霊の力によって生かされますように助けて下さい。”と祈りましょう。2013年今年もずっと神様の御言葉がみなさんに聞こえ、日々、力ある御言葉、知恵の言葉によって勝利される一年となりますよう主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン！